

## ふくふくしめじの大きさは光環境の影響を受ける

○久保智裕

### 【はじめに】

県オリジナル品種のホンシメジ「ふくふくしめじ（福島 H106 号）」は県内の生産者によって簡易ハウス内での自然環境を活かした栽培が行われているが、発生年や栽培環境によってきのこの形が異なるなど、品質の安定化が求められている。

今回は、栽培環境によるきのこの形への影響を明らかにするため、簡易ハウスの遮光率および湿度条件による影響を調査した。

### 【調査方法】

栽培は当センター敷地内の屋外に設置した簡易ハウスで、9月下旬から11月上旬にかけて実施した。菌床は福島県きのこと振興センターが製造した福島 H106 号培養済み(22±2℃、120日間)の1400mlPPビン広葉樹チップ培地を使用した。発生操作及び管理は、事前給水した鹿沼土中粒で菌床上面から1～2cmほど覆土し、ハウス内で遠心式加湿器等を用いて実施した。

試験区はハウスシートの遮光率3条件(40、85、99%)と湿度環境3条件(低、中、高)を組み合わせた計9区とし、1試験区当たりの菌床数は27とした。調査項目は、収量及びきのこの傘及び茎の大きさとした。また、傘部直径と茎部長から傘茎比(傘直径÷茎長)を算出し、各区で比較した。

### 【結果および考察】

収量の結果を図-1に示す。遮光率の比較では、85%での収量が最も多く、統計的な有意差が認められた。また、湿度環境の比較では、「高」の収量が最も多く、有意差は一部試験区間でのみ認められた。

遮光率ごとの傘茎比発生割合を図-2に示す。遮光率の比較では、多くが1.0未満で茎長が傘直径よりも大きいきのこだったが、遮光率40%では他の試験区に比べて、傘直径が茎長よりも大きい(傘茎比が1を超えている)きのこが多く発生し、統計的な有意差が認められた。一方で、湿度環境の比較では、「中」は他の環境よりも茎長が長いきのこが多く発生することが確認できたが、統計的な有意差は認められなかった。

ハウス内の光条件によって、きのこの大きさが変化したことから、生産者は簡易ハウスの光環境を変えることによって、特色のあるふくふくしめじを栽培することが可能となり、他生産者との差別化を図ることができると考えられた。

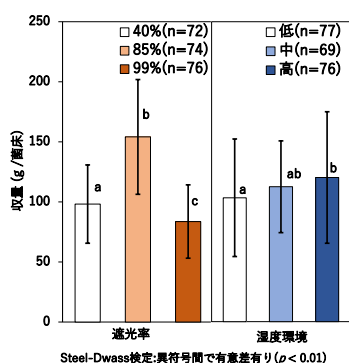


図-1 収量性の結果

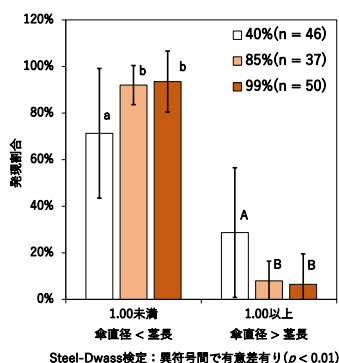


図-2 遮光率ごとの傘茎比



図-3 遮光率ごとに発生したきのこ